

「神奈川県立生命の星・地球博物館」への魚類画像データ提供について

漁業調査指導船「ほうじょう」では、釣獲調査や底曳き調査の際、採捕、混獲された魚類は、写真撮影をすると同時に、位置や水深、水温等を記録してデータ化しています。

そして、このデータを「神奈川県立生命の星・地球博物館」へ提供することで、魚類写真資料データベース <http://nh.kanagawa-museum.jp/research/fish/index.html> の作成に協力しています。

(魚類写真資料データベースは同博物館と国立科学博物館共同)



アカタチ (本船にて混獲したものを撮影)

<神奈川県立生命の星・地球博物館ホームページから>

魚類写真資料データベースは、このように役立っています。

分類学的研究：かつて新種の発見は研究者の手によって行われてきましたが、最近ではダイバーが撮影した写真にもとづいて新種が発見される例が多くなりました。つまり、魚類写真資料データベースの活動が実際に新種の発見に結びつくわけです。また、魚類写真資料データベースに登録された数多くの画像を見ることによって、個体変異や地域変異に関する情報を得ることができます。

生態学的研究：水中写真の撮影日や撮影水深を利用すれば、魚の出現時期や生息水深を知ることができます。たとえば、伊豆半島沿岸で撮影されたカミソリウオ科の魚を検索すると、撮影された月は9月-12月、撮影水深は10-20mの範囲に集中していることがわかります。また、いろいろな魚の水中での定位姿勢や共生の事実などの記録にも役立っています。

生物地理学的研究：最も得意とするのがこの分野です。地域ごとに撮影された魚種をリストアップすれば魚類相を明らかにすることができます。逆に、種ごとの撮影地をリストアップすれば分布範囲を知ることができます。